

平成 29 年度埼玉県オハイオ州スカラシップ
語学・大学留学コース 最終レポート
「さようならの代わりに」

小口 智美

アメリカに来てから早 9 か月。日本に帰らなくてはならないときがやってきました。楽しかったこと、大変だったこと、失敗したこと、けんかしたこと… 様々なことを経験しました。このプログラムに参加していなかったら、こんなに楽しかった思い出を作ることもなく、大変な思いをしたことも少なかったと思います。しかし確実に言えることは、フィンドレーでの経験からたくさんのものでしたということです。この 9 か月の留学を支えてくださった埼玉県庁国際課の職員の方々のおかげで今の私があります。本当にありがとうございます。

今回のレポートでは、留学を通して得たものと私の心に残っている印象的な思い出をご報告します。

では早速、今回の留学を通して私が得たものをご紹介します。

1. 迷惑とは何か
2. やればできる
3. 外国人として生活すること

1. 迷惑とは何か

私は今回の留学で迷惑という言葉の考え方が変わりました。それは人に頼ることは必ずしも迷惑ではないということです。

私は幼いころから家庭や学校で「他人に迷惑をかけてはいけない」と言われ、それが当たり前だと思っていました。そのため、問題が起こったときはなるべく自分で解決し、他の人を煩わせるようなことはしてはいけないと思っていました。しかし、アメリカではそうはいきません。言葉も含め、初めてで分からないことがたくさんあります。分からないことがあると周りの人に聞いたり、手伝ってもらったりすることが多かったです。

例えば、レポートを書いたときは文法などを友達に添削してもらいました。そのとき、私の中には忙しいのに私のために時間を取ってしまって申し訳ないという気持ちがありました。その気持ちを伝えると、「迷惑だと思ったことは一度もないよ。智美（私）もいつも日本語の宿題を手伝ってくれるし、日本語で分からないことがあれば教



親友の一人。英語の課題、日本語の課題をお互いに助け合いました。

えてくれるじゃない。助け合うのが友達だよ。」と言ってくれました。私はその友達の日本語の勉強の手助けをしていましたが、そのことに対して迷惑だと思ったことは一度もありませんでしたし、友達の力になれるという嬉しさが大きかったです。

しかし、このようにお互いに助け合うことができたのは私たちの人間関係が良かったからだと思います。やはり、相手に頼ってばかりではいけないし、物事を頼むときの態度も重要です。お互いに頼りあえる関係だったから親友になれたのか、親友だったからお互いに頼りあえる関係になったのかは分かりませんが、一緒に過ごす中でお互いに成長できたのは事実です。親友とのつながりを通して、人に頼ること、人から頼ってもらうことを学びました。それは決して迷惑なのではなく、お互いに信頼しているからできることなのだということを知りました。

2. やればできる

「やればできる」この言葉は小学校5年生、6年生のときの担任の先生がよく言っていた言葉です。今回の留学でこの言葉を改めて実感することが出来ました。

私は今まで家族と住んでいたため、一人で全ての家事を同時にするという経験がありませんでした。しかし、アメリカでは全て一人でやらなければいけません。特に私は、普段から料理をする機会が多くありませんでした。そのため、私は料理があまり得意ではないと思っていました。カフェテリアで使えるチケットを購入していたため、平日の昼食と夕食の心配をすることはありませんでしたが、休日のご飯は自分で用意しなければなりませんでした。それに加え、よくホームパーティーに参加していたので、手料理をふるまう機会が多かったです。日本で作ったことのない料理を作ることに加え、アメリカでは手に入りにくい材料を違う食材で代用しなければならないなど、最初は苦労しました。ねぎやニラ、大根はスーパーに売られていませんでした。自分で材料を買いレシピを見て味見をしながら料理を作る中で「な



特に好評だったラーメンパーティー。みんな箸を使って食べました。

んだ、できるじゃん」と思いました。私の作った料理は友達たちにも好評で、作り方を教えてほしいと言われたことも多くありました。今まで料理が得意ではないと思っていたのは、自分自身の経験の無さからくるものでした。しかし挑戦してみることで、得意ではないと思っていた料理が得意であることに気づきました。そこで恩師の「やればできる」という言葉を思い出し、挑戦することの大切さを実感しました。

ほぼ毎週のように誰かの家に遊びに行ってはパーティーをしました。毎回ではありませんでしたが、料理を作りました。友達が作った他国の料理を食べ



友達2人の誕生日パーティー。私は友達と写真左のショートケーキを作りました。

ることもできたので、毎回週末を楽しみにしていました。私が作った料理の中で印象に残っている料理はラーメンとケーキです。友達をたくさん招いて一緒にラーメンを作りました。インスタントラーメンではなく、本格的なラーメンを作りたいとの友達の希望で、麺を買いスープから作ることにしました。トッピングの煮卵に関しては前日から準備をするという気合の入れようです。ラーメン用の麺が手に入らず、ラーメンうどんの間のような麺で代用しましたが、みんな満足してくれました。煮卵だけおかわりがあったのですが、誰が食べるのかをじゃんけんで決めるほどの人気でした。

友達の誕生日にはサプライズでショートケーキを作りました。アメリカでは誕生日にケーキを食べることはありませんが、ショートケーキのような生クリームとフルーツがのっているケーキはあまり食べません。一緒に作った日本語学科の友達がショートケーキにあこがれを持っていたので、ショートケーキを作ることになりました。15人ほどが集まった誕生日パーティーでしたが、全員が少しずつ食べることが出来ました。

これから、得意不得意を最初から決め付けるのではなく、様々なことに

挑戦することの大切さを実感しました。

進んで挑戦してみたいと思います。

3. 外国人として生活すること

この9か月は日本を離れ、外国人として生活をしました。その中で、文化や考え方の違いに戸惑ったこともありました。特に戸惑ったことは、予定が急に決まることと、計画通りに物事が進まないということです。特に大人数での場合によく起こりえます。パーティーの始まる2時間前に急に誘われたこともありましたが、予定していたパーティーが急に中止になったこともありました。時間通りに始まらないことも当たり前です。パーティーが夜7時から始まる予定だったため、夜7時までに料理が完成するように努力をしました。7時半までにはみんなで料理を食べ始めることができると考えていました。しかし、結局料理を食べ始めることが出来たのは8時半過ぎです。料理も冷めてしまったため、ちょっとがっかりでした。ホームパーティーでは、予定していた人が連絡なしに来なかったり、予定していなかった人がひょっこり現れたりすることも度々あります。このようなことを経験するにつれ、細かいことを気にしなくなりました。それよりも、友達と楽しむということ大切にしました。

また、会話をするときには戸惑ったこともあります。話していることは分かっても、話題についていけないことがありました。周りの友達たちはアメリカで育っているため幼い時に流行っていた歌や映画、ドラマなどについて共通の話題があります。しかし、私は日本で育っているため、そのような知識はありません。ですから、友達がドラマや映画に出てくる登場人物の真似をして周りが笑っていても、私は何が起きているかが理解できず、笑えないのです。そのとき、言葉を理解し話せるようになっても、説明しがたい違和感がありました。友達が背景を説明してくれることも多かったですが、その度に、この先、どんなに言語が上手になっても私は外国人に変わりはないんだ、と思いました。それがいい、悪いということではありませんが、私は一生、日本での生活の中で得た文化を持って生きていくのだろうと悟りました。



この留学生生活を振り返ってみて感じたこと

30分以上かけて買いに行ったアイスクリーム。

は、いつも周りに多くの友達がいたということです。授業前に集まっておし



アイスcreamを食べた帰り道。

ゃべりや勉強をし、それぞれの授業の後カフェテリアで一緒に夕食をとり、そのあとには図書館の個室やAMUという24時間学生が自由に使える建物で一緒に勉強をしました。毎日深夜12時を超えるまでAMUで一緒にいました。私たちの考えは、平日に課題をすべて終わらせ、週末は課題の心配をすることなく一緒に過ごす時間を作ることでした。その結果、週末には大学のシャトルバスに乗って近所のスーパーに行ったり、一緒に料理を作ったり部屋で映画を見たりしました。天気のいい日には片道30分以上かけて徒歩でおいしいアイスクリーム店に行ったこともあります。

特に印象に残っている思い出は、深夜に野外映画会をしたことです。春学期の試験期間中の暖かい日でした。私を含め友達たちは全て

の試験が終わっていたので、何か楽しいことをしようという話になりました。

春学期の試験期間が終わると寮は閉鎖されてしまうため、荷物をまとめて実家に帰らなくてはなりません。友達のうちの一人が他大学に編入すること、そして私が日本に帰らなくてはならないことから、最後に何か楽しい思い出を作りたいかったです。そこで、アイスを食べながら大学の敷地内の芝生で映画を見ようという話になりました。もちろん、その計画が立てられたのは当日の夕食後です。ナイトウォークと称し、徒歩で30分かけて近所のスーパーでアイスとお菓子を買に行きました。あまりおすすめはしませんが、フィンドレーは比較的安全な都市なので、夜に外を歩いてもそれほど危険ではありません。帰りは、私たちを心配した友達が車で迎えに来てくれました。



スーパーの外で。バナナチップスも買いました。



野外映画観賞会。楽しく話をしながら映画を見ました。

芝生にブランケットを敷き、ノートパソコンで映画を見ました。友達が食べ物を作って持ってきてくれたため、みんなで食べながら映画を見ました。途中まで楽しく見ていたのですが、ぽつぽつと雨が降り始めました。それもつかの間、突然大雨が降ってきたの

であわてて近くの建物に逃げ込みました。濡れながらみんなで大笑いして近くの建物に避難したことはとても

もいい思い出になりました。留学生活全体に関しても言えることですが、ハプニングがあったからこそ、忘れられない楽しい思い出になったのだと思います。

私のレポートをここまで読んでくださり、ありがとうございます。ここで今回のレポートのタイトルに注目していただきたいのですが、さようならの代わりに…何だろう?と思われた方もいると思います。それは「またね」です。私はフィンドレーから埼玉県に戻ってきました。みんなにお別れの挨拶はしましたが、これが最後の別れではありません。毎日フィンドレーに向かう飛行機が飛んでいます。空港まで迎えに来てくれる友達、フィンドレーで私を待っていてくれる友達があります。時間とお金があればいつでもフィンドレーに帰ることができます。そんな私の居場所を作ってくれているみんなに「さようなら」ではなく「またね」と言いたいのです。

重ねてのお礼となりますが、今回の私の留学生活を支えてくださった方々、特に埼玉県庁国際課の職員の方々に大変感謝をしています。ありがとうございました。これから、この留学で得たことを埼玉県に還元できるよう努力して参ります。その第一歩として、このプログラムを多くの人に知ってもらう活動をしていきます。私は川口市に住んでおり、中学生・高校生の時に海外派遣事業というプログラムに参加しました。それは、オーストラリア 10 日間、もしくはカナダ 3 週間のホームステイや現地学校での授業参加を通して異文化に触れるというプログラムです。そこで、今年の派遣生に向けて私の海外派遣事業での経験とフィンドレーでの生活で得た経験をお話しする機

会を頂きました。今回私が参加したプログラムを多くの人に知っていただき、多くの方がこのプログラムにチャレンジするきっかけを作れればと思っています。そのほかにも、埼玉県のためにできることを見つけ、実践していきたいと思います。

最後までレポートを読んでくださり、ありがとうございました。